

大相撲における朝青龍時代から白鵬時代への移行の可能性

～白鵬は朝青龍を凌ぐ横綱になり得るか：その出世、
両者の対戦の分析からの検討～

A Possibility of a Shift from ASASYOURYU Era to HAKUHO Era in Professional Sumo Wrestling.

Will HAKUHO be able to surpass ASASYOURYU

～The Investigation from Analysis of His Success in Sumo Wrestling and the Bouts of the Two Wrestlers～

植屋清見¹⁾ 小町昂史²⁾ 山田直弘²⁾

澤辺直人²⁾ 比留間浩介³⁾

Kiyomi UEYA Takahumi KOMACHI Naohiro YAMADA

Naoto SAWABE Kohsuke HIRUMA

キーワード：大相撲 朝青龍 白鵬 取り口 バイオメカニクス

I. 緒言

大相撲を振り返り、戦前の双葉山（3年の間無敗の69連勝）時代、戦後の日本を活気づけてくれた栃若（栃錦・若乃花）時代、柏鵬（柏戸・大鵬）時代、戦後生まれの力士が主流になってからの湖輪（北の湖・輪島）時代、そして千代の富士時代、曙貴（曙・貴乃花）時代を経て、この数年はモンゴル出身の朝青龍独走時代が続いて今日を迎えている。しかし、朝青龍が肘の故障の治療目的で夏の巡業に参加せず、帰国した母国モンゴルでサッカーのゲームに参戦し、そのことに関しての謹慎処分を受けて2場所出場禁止を受けて以来、あの憎らしいほどの強さを誇っていた朝青龍の強さ（平成17年度年間84勝の歴代第一位の勝ち星）にも陰りが見え始めている。

平成20年7月場所（平成20年7月13日～7月27日）は6日目からの途中休場、続く9月場所も10日目からの休場となった。朝青龍が休場したこの2場所は横綱白鵬が15勝全勝、14勝1敗の2場所連続の優勝を果たした。世間は両者のこの現実で大相撲界は朝青龍独走時代の終焉から青白時代をも一気に超えて、白鵬時代の到来を予言する雰囲気になっている。果たして、このような朝青龍独走時代から白鵬時代への移り変わりの可能性は現実となるのであろうか。また、横綱白鵬は大横綱朝青龍を凌ぐ大横綱に成り得るのであろうか。

平成20年9月場所は横綱白鵬の14勝1敗の優勝に終わった。これは白鵬にとって8度目の優勝であった。一方、横綱朝青龍は7月場所の安馬戦で痛めた左肘の悪化により、中盤の5勝4敗の後の10日目から休場となった。横綱朝青龍はこれまで通算22回の優勝賜杯を手にかけている大横綱である。優勝回数から言えば大鵬の32回、千代の富士の31回、北の湖の24回、貴乃花の22回に並ぶ、史上第4位の横綱である。これまでの輝かしい朝青龍の戦績は年間勝ち星84勝6敗。まさに1年間6場所を通して、僅かに6回しか負けなかった時代もあった。

1) 保健体育講座 2) 山梨大学大学院 3) 筑波大学大学院

II. 研究目的

本研究の目的は横綱白鵬が果たして優勝回数22回（全勝優勝5回）の大横綱の誉れ高い朝青龍時代から白鵬時代への突入の可能性があるのか、また朝青龍を超える大横綱となり得る可能性を持っているか否かを、彼の出世や平成20年1月場所の47秒間に及ぶ朝青龍との対戦の分析などの観点から検討することである。

III. 研究方法

横綱白鵬の大相撲入門から今日までの諸資料における戦績分析やテレビ放映された取り組みの分析などを通して、横綱白鵬の取り口をFrame-DIAS II によるバイオメカニクスのコンピュータ分析から検討する方法によった。

IV. 結果及び考察

1. 白鵬と朝青龍の出世～驚くべき両者の出世の早さ

図1は白鵬の入門から現在に至る出世の状況を朝青龍との対比として示したもので、表1及び表2は各段の所要場所と通算成績並びにその勝率である。

大相撲の世界では「3年先の稽古をせよ」という言葉があるが、入門から力士が一人前の地位と言われる十両に昇進するには数年はかかり、十両に上られる確率は入門時の10%、幕内力士では6%、三役力士は1.4%、大関は0.8%、横綱は0.3%（平成20年9月場所時点）といわれる中で、白鵬の出世はまさに異例中の出世である。但し、その異例中の出世も横綱朝青龍と比較すると、朝青龍の出世の速さは白鵬の比ではない。

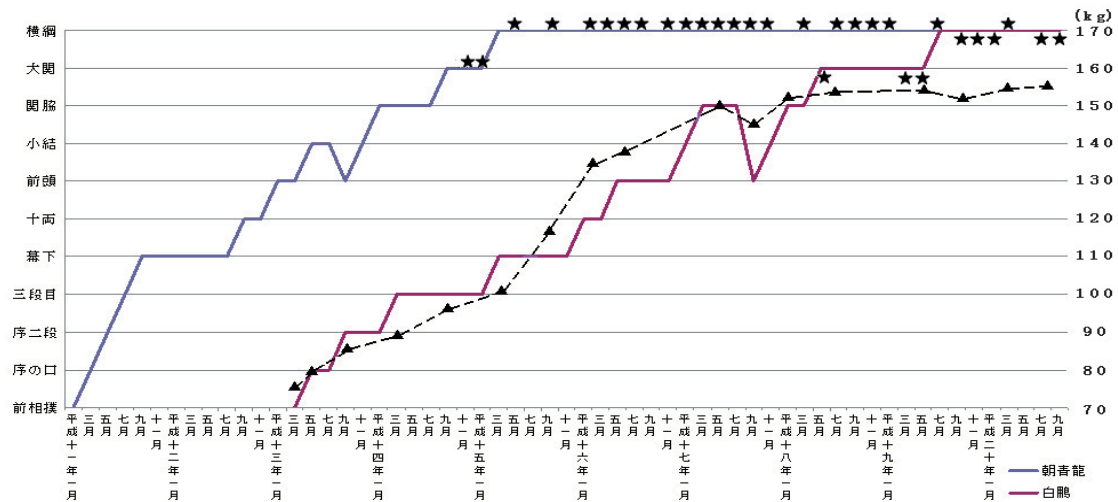


図1 白鵬と朝青龍の出世の比較と白鵬の体重の増加（★は優勝、▲は白鵬の体重）

1) 4年2ヶ月で横綱となった朝青龍と6年2ヶ月で横綱となった白鵬

序の口2場所（8勝6敗）、序二段3場所（14勝7敗）、三段目6場所（26勝16敗）、幕下5場所（25勝10敗）での通過で、付き人が付く十両昇進までの所要場所は僅か16場所（69勝35敗）であった。その後、十両僅か2場所（21勝9敗）、幕内通算5場所（52勝33敗）、小結も通算で僅か2場所（20勝10敗）、関脇通算5場所（49勝20敗6休）で、関脇で13勝2敗を2場所続け、小結時代の3場所通算35勝10敗の成績で大関に推挙された。新大関の2006年5月場所で初優勝（14勝1敗）、大関2場所目で準優勝（13

勝 2 敗) の好成績を収めるが、横綱への推挙は見送られた。しかし、大関 6 場所目での 13 勝 2 敗 (優勝) と 15 戦全勝 (優勝) の 2 場所連続優勝の実績で 2007 年 5 月 30 日に第 69 代横綱に推挙された。

表 1 白鵬の初土俵 (平成 13 年 3 月場所) から平成 20 年 9 月場所までの各場所の勝敗 (★:年間最多勝)

年	月	地位	成績	年	地位	成績	年	地位	成績	年	地位	成績
2000	1			2000	東序二段 33	5 勝 2 敗	2000	東三段目 16	5 勝 2 敗	2000	東十両 12	9 勝 6 敗
	3	初土俵	一番出世		東三段目 98	6 勝 1 敗		西幕下 54	4 勝 3 敗		西十両 8	12 勝 3 敗
	5	東序ノ口 16	3 勝 4 敗		東三段目 38	4 勝 3 敗		西幕下 44	5 勝 2 敗		東前頭 16	12 勝 3 敗
	7	東序ノ口 18	5 勝 2 敗		西三段目 23	3 勝 4 敗		東幕下 30	4 勝 3 敗		東前頭 8	11 勝 4 敗
	9	東序二段 97	5 勝 2 敗		西三段目 44	4 勝 3 敗		東幕下 23	6 勝 1 敗		東前頭 3	8 勝 7 敗
2005	11	東序二段 55	4 勝 3 敗	西三段目 28	4 勝 3 敗	東幕下 9	6 勝 1 敗	西前頭筆頭	12 勝 3 敗			
	17 勝 3 敗			26 勝 16 敗			26 勝 16 敗			64 勝 26 敗		
	1	西小結	11 勝 4 敗	西関脇	13 勝 2 敗	西大関	10 勝 5 敗	東横綱	14 勝 1 敗			
	3	西関脇	8 勝 7 敗	東関脇	13 勝 2 敗	西大関	13 勝 2 敗	東横綱	12 勝 3 敗			
	5	東関脇	9 勝 6 敗	西大関	14 勝 1 敗	東大関	15 勝 全勝	西横綱	11 勝 4 敗			
2007	7	東関脇	6 勝 3 敗 6 休	東大関	13 勝 2 敗	西横綱	11 勝 4 敗	西横綱	15 勝 全勝			
	9	西前頭筆頭	9 勝 6 敗	東大関	8 勝 7 敗	西横綱	13 勝 2 敗	東横綱	14 勝 1 敗			
	11	西小結	9 勝 6 敗	西大関	全休	東横綱	12 勝 3 敗	東横綱				
	52 勝 32 敗 6 休			61 勝 14 敗 15 休			★ 74 勝 16 敗			★ 66 勝 9 敗		

表 1、2 は白鵬と朝青龍の毎場所の勝敗、表 3 は両者の各段の通算成績及び勝率を示したものであるが、朝青龍を白鵬と比較すると各段の通過、十両、幕内、三役、大関、横綱昇進のペースが驚くほど早い。勿論、優勝回数、全勝優勝の回数、通算勝率など全てにおいて朝青龍の方が優れている。

表 2 朝青龍の初土俵 (平成 11 年 1 月場所) から平成 20 年 9 月場所までの各場所の勝敗 (★:年間最多勝)

年	月	地位	成績	年	地位	成績	年	地位	成績	年	地位	成績
1999	1	初土俵	一番出世	2000	西幕下 12	3 勝 4 敗	2000	西前頭 12	9 勝 6 敗	2000	西関脇	8 勝 7 敗
	3	東序ノ口 34	6 勝 1 敗		西幕下 19	5 勝 2 敗		東前頭 6	9 勝 6 敗		西関脇	11 勝 4 敗
	5	西序二段 85	7 勝 全勝		西幕下 9	6 勝 1 敗		西小結	8 勝 7 敗		東関脇	11 勝 4 敗
	7	西三段目 75	7 勝 全勝		西幕下 2	7 勝 全勝		東小結	7 勝 8 敗		東関脇	11 勝 4 敗
	9	東幕下 53	6 勝 1 敗		東十両 7	9 勝 6 敗		西前頭筆頭	10 勝 5 敗		東大関	12 勝 3 敗
2003	11	東幕下 27	6 勝 1 敗	西十両 3	11 勝 4 敗	東小結	10 勝 5 敗	東大関	10 勝 5 敗			
	32 勝 3 敗			41 勝 17 敗			53 勝 37 敗			66 勝 24 敗		
	1	東大関	14 勝 1 敗	東横綱	15 勝 全勝	東横綱	15 勝 全勝	東横綱	11 勝 4 敗			
	3	西横綱	10 勝 5 敗	東横綱	15 勝 全勝	東横綱	14 勝 1 敗	東横綱	13 勝 2 敗			
	5	東横綱	13 勝 2 敗	東横綱	13 勝 2 敗	東横綱	15 勝 全勝	東横綱	1 勝 2 敗 12 休			
2007	7	東横綱	5 勝 5 敗 5 休	東横綱	13 勝 2 敗	東横綱	13 勝 2 敗	東横綱	14 勝 1 敗			
	9	東横綱	13 勝 2 敗	東横綱	9 勝 6 敗	東横綱	13 勝 2 敗	東横綱	13 勝 2 敗			
	11	東横綱	12 勝 3 敗	東横綱	13 勝 2 敗	東横綱	14 勝 1 敗	東横綱	15 勝 全勝			
	★ 67 勝 18 敗 5 休			★ 78 勝 12 敗			★ 84 勝 6 敗			★ 67 勝 11 敗 12 休		
	1	東横綱	14 勝 1 敗	西横綱	13 勝 2 敗	西横綱	13 勝 2 敗	西横綱	3 勝 3 敗 6 休			
2007	3	東横綱	13 勝 2 敗	西横綱	13 勝 2 敗	西横綱	5 勝 5 敗 5 休	西横綱	5 勝 5 敗 5 休			
	5	東横綱	10 勝 5 敗	東横綱	11 勝 4 敗	西横綱		西横綱				
	7	東横綱	14 勝 1 敗	西横綱	3 勝 3 敗 6 休	西横綱		西横綱				
	9	東横綱	全休	西横綱	5 勝 5 敗 5 休	西横綱		西横綱				
	11	西横綱	全休	西横綱		西横綱		西横綱				
51 勝 9 敗 30 休			45 勝 16 敗 11 休									

横綱朝青龍は平成 11 年初場所 17 歳 3 ヶ月で大相撲界に入門し、僅か 4 年 2 ヶ月で天下の横綱になっ

た。一方、横綱白鵬は平成13年春場所で入門し、6年4ヶ月で横綱に昇進した。各段の昇進を見ると、朝青龍の初土俵は平成11年1月の初場所で、序の口は平成11年3月の春場所、序二段昇進は平成11年5月の夏場所、三段目昇進は平成11年7月の名古屋場所、幕下昇進は同11年9月の秋場所、そして念願の十両昇進は平成12年9月の秋場所であった。更に幕内昇進は平成13年1月の初場所、小結昇進は平成13年5月の夏場所、関脇昇進は平成14年1月の初場所、大関昇進は平成14年9月の秋場所、そして念願の横綱昇進は平成15年3月の春場所であった。

表3 白鵬と朝青龍の初土俵から平成20年9場所までの各段における通算成績とその勝率の比較

地位	白鵬			朝青龍		
	場所数	各段通算成績	勝率	場所数	各段通算成績	勝率
初土俵	1			1		
序の口	2	8勝6敗	0.571	1	6勝1敗	0.857
序二段	3	14勝7敗	0.667	1	7勝全勝	1.000
三段目	6	26勝16敗	0.620	1	7勝全勝	1.000
幕下	5	25勝10敗	0.714	6	33勝9敗	0.786
十両	2	21勝9敗	0.700	2	20勝10敗	0.667
平幕	5	52勝33敗	0.611	3	28勝17敗	0.622
小結	2	20勝10敗	0.667	3	25勝20敗	0.556
関脇	5	49勝20敗6休	0.710	4	42勝18敗	0.683
大関	6	73勝17敗15休	0.811	3	38勝7敗	0.800
横綱	8	102勝18敗	0.850	34	367勝153敗58休	0.836
生涯成績	45	380勝136敗21休	0.736	59	584勝133敗61休	0.821
幕内成績	26	286勝88敗21休	0.765	47	511勝103敗46休	0.832

2. 出世と身長・体重の増加

図1にも見られるように、白鵬の出世の背景に彼の形態的（身長・体重）な変化が見られる。大相撲の世界に足を踏み入れたときの白鵬の身長・体重は1.76m、67kgであったが、2001年夏場所（東序の口18枚目）時：1.80m、80kg、2001年九州場所（東序二段55枚目）時：1.80m、86kg、2002年5月場所（東三段目38枚目）時：1.85.5m、89.5kg、2002年11月場所（西三段目28枚目）時：1.85.5m、95.5kg、2003年3月場所（西幕下54枚目）時：1.87m、101.5kg、2003年11月場所（東幕下9枚目）時：1.87m、118kg、2004年春場所（西十両8枚目）時：1.89m、134kg、2004年7月場所（東前頭8枚目）時：1.89m、138kg、2005年1月場所（西小結）時：1.92m、146kg、2005年5月場所（東関脇）時：1.92m、150kg、2006年3月場所（東関脇）時：1.92m、152kg、2006年7月場所（東大関）時：1.92m、153kg、2007年1月場所（西大関）時：1.92m、154kg、2007年11月場所（東横綱）時：1.92m、151kg、2008年3月場所（東横綱）時：1.92m、153kg、2008年7月場所（西横綱）時：1.92m、156kgであった。身長では1.76mから1.92mの16cmで、体重は67kgから156kgの89kg増と入門時の体重の2倍以上の体重増になっている。身長も体重も2005年5月場所で1.92m、150kgを越え、それ以降現在までそれ程の増加は見られないが、恐らく今後は160kg台への体重増が考えられる。この体重増がもたらされれば、攻撃の当たりの強さや守勢にまわった時にも簡単に押されない相撲が取れるようになってくるものと思われる。体重の増加も今後の白鵬の取り組みを

表4 白鵬と朝青龍の初対戦からの対戦結果

地位	白鵬	場所	朝青龍
前頭3枚目		平成16年9月	下手投げ
前頭筆頭	送り出し	平成16年11月	
小結		平成17年1月	押し出し
関脇		平成17年3月	寄り切り
		平成17年5月	押し出し
前頭筆頭		平成17年9月	寄り倒し
小結		平成17年11月	押し出し
関脇	小手投げ	平成18年1月	
	上手出し投げ	平成18年3月	
大関	寄り倒し	平成18年7月	
		平成18年9月	寄り倒し
		平成19年1月	寄り切り
		平成19年3月	引き落とし
	上手出し投げ	平成19年5月	
横綱		平成19年7月	寄り切り
	上手投げ	平成20年1月	
		平成20年3月	小手投げ
		平成20年5月	引き落とし
	6	対戦成績	12

考える上で、重要な要因となるであろう。

3. 白鵬対朝青龍の直接対決

表4は白鵬と朝青龍の直接の対戦を対戦時の白鵬の地位、きまり手の結果を示したものである。両者の最初の対戦は平成16年9月場所で、白鵬は前頭3枚目で朝青龍は既に横綱を張っており、8回の優勝を果たしていた時であった。結果は番付通り朝青龍の下手投げでの勝利であった。白鵬の初勝利は次の11月場所での送り出しであった。以後両者の対戦は朝青龍の12勝6敗の成績であり、この結果を見る限りでは両者の間にはまだまだ力の差があると思われるが、白鵬が関脇に再昇進した平成18年以降の対戦成績を見ると白鵬の5勝6敗と両者の対戦成績はほぼ拮抗しており、通算成績に見る程の差は見られない。

4. 平成20年初場所における白鵬対朝青龍の「47秒」に及ぶ死闘の取り組み

1) 取り組みの流れ

平成20年初場所の千秋楽は両者13勝1敗同士の優勝を賭けた一番であった。結果的には白鵬が左からの上手投げで勝利を収めた一番であったが、この一番は恐らく後生において大相撲界の一大一番として記憶に残るであろうし、この一番を境に朝青龍と白鵬の逆転が始まった一番と評される取り組みであった。

図2はその取り組みの局面ごとの連続写真である。若干の解説を加えれば、立ち合いから白鵬が右差しをねらった組み手争いの後白鵬が右四つに組み止めた。その後、朝青龍が吊り気味に攻勢を掛け、再び土俵中央でがっぷり四つになった後、長い引きつけ合いとなった。再び、朝青龍がここの一番とばかりに吊りに出たが吊りきれずに白鵬に残された。その後、両者ががっぷりの引きつけ合いとなったが吊りきれなかった朝青龍の腰が幾分伸びきっていた状態を白鵬が見逃さず、左からの強力な上手投げで土俵に投げつけた一番であった。まさに、力と力のぶつかり合い、引きつけあり、吊りあり、投げありの、手に汗握る世紀の一大一番にふさわしい取り組みであった。

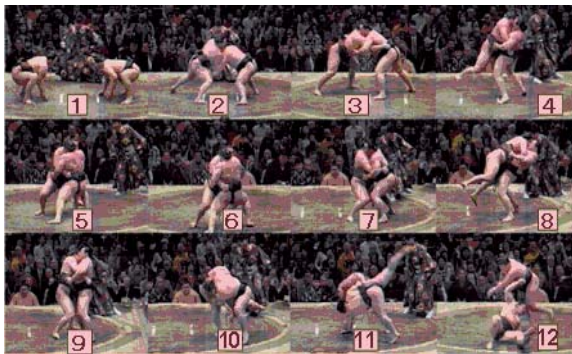


図2 平成20年初場所千秋楽における白鵬と朝青龍の取り組みの連続写真(NHK放映画像から作成)

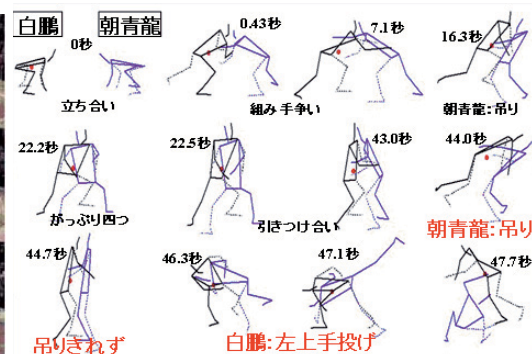


図3 図2の連続写真のスティックピクチャー

かりに吊りに出たが吊りきれずに白鵬に残された。その後、両者ががっぷりの引きつけ合いとなったが吊りきれなかった朝青龍の腰が幾分伸びきっていた状態を白鵬が見逃さず、左からの強力な上手投げで土俵に投げつけた一番であった。まさに、力と力のぶつかり合い、引きつけあり、吊りあり、投げありの、手に汗握る世紀の一大一番にふさわしい取り組みであった。

2) 勝敗の秘訣に関する要因

(1) 立ち合い

図4は両者の立ち合いからがっぷり四つになる直前までの両者の動作を4枚の連続写真にまとめ、両者の各瞬間の身体重心の速度(合成)の値とそのベクトルを図中に挿入したものである。白鵬は両手をしっかり土俵についているが、朝青龍は、左手を土俵に静止していない。

立ち合いの速度はいち早く張り差しに行った白鵬が2.013m/sで、朝青龍は1.517m/sであった。両者

の身体がぶつかった瞬間の速度は白鵬1.385m/sで、朝青龍は0.585m/sと白鵬の方が圧倒している。但し、白鵬が左足で踏み込んでがっぶり四つになる直前では白鵬0.536m/s、朝青龍0.456m/sとほぼ互角の立ち合いとなっている。この一番でも朝青龍は、右手はついてるが、左手はチョコンと立ち合いの瞬間だけついで（相撲界ではチョン立ちという）立ち合いで横綱としては品格を欠くとも言えよう。

(2) 朝青龍の「吊り」の分析

図5は土俵中央での長い引きついで、立ち合いから43秒経過時点で朝青龍がこぞとばかりに吊り上げに掛かってから最終的には吊り上げきれずに逆に白鵬に逆襲の切っ掛けを与えてしまった僅か1.60秒間の分析であり、勝敗の結果

を左右する重要な局面のバイオメカニクス的な分析結果である。①の状態は白鵬の身体重心高が0.84mで、④の状態の1.20mまで吊り上げたが白鵬の両脚をバタつかせての反撃を防ぎきれず、⑤の白鵬が両足を土俵に着いた瞬間の重心高は1.08mの重心高であった。吊り上げのために発揮した力(Fy)は①～②ではほぼ200kgW前後で、②の時点の直前で再度大きな力を発揮すべく一度力を減じ、そして0.42秒～0.70秒に掛けて力を増大させ、最大値では238kgWに達している。しかし、その後は、力は減少し、結果として吊り上げきれなかった。吊り上げ動作のパワー(Py)は吊り上げ速度とほぼ同調し、ほぼ同じようなパターンを示している。パワーの最大値は吊り初めの150kgW・m/sでその後は吊りきれなかった④では速度がゼロになった関係でパワー値もゼロとなっている。朝青龍が吊りきれなかった原因は②～③に掛けて膝の入りが弱く白鵬の身体を十分に引きつけられず、さらに肘の引き付けが弱いと自分の重心の上に白鵬の重心を乗せ切れなかったところにあると考えられる。もちろん白鵬の体の寄せが強かったこともその一因と考えられる。

(3) 勝敗を決めた白鵬の左上
手投げの秘訣

図6は吊りをこらえ、左上手投げで朝青龍に勝利した白鵬の動作のスティックピクチャーである。勝因は白鵬を吊り上げきれなくて白鵬の足

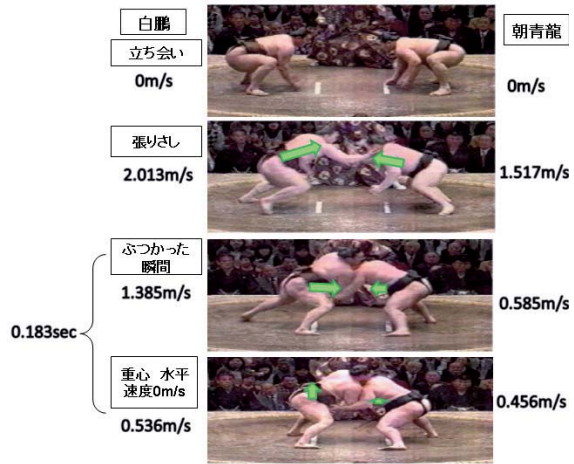


図4 白鵬と朝青龍の立ち合い(平成20年初場所千秋楽優勝をかけた一番)の分析結果

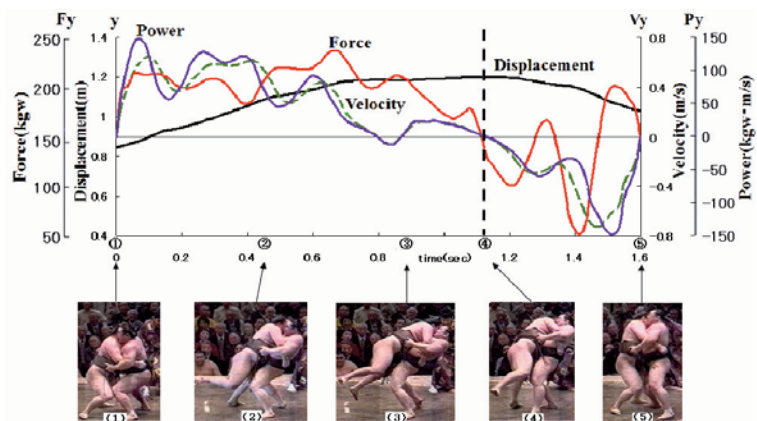


図5 朝青龍の吊りとそれを防いだ白鵬の攻防

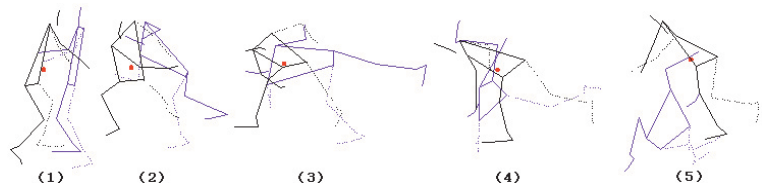


図6 左上手投げで朝青龍に勝利した白鵬の動作のスティックピクチャー

が土俵に着いた時に白鵬の強力な引きつけに朝青龍の腰が伸びきった状況を見逃さず、左からの回転を効かせた上手投げができたことである。この左からの上手投げは白鵬が大相撲の世界に入り、前相撲で初白星を飾ったときの左上手投げと同じ決まり手であった。

IV. 論議

1. 白鵬の入門のきっかけ

白鵬の角界への入門はまさに奇跡とも思われる状況から始まった。大相撲で活躍していたモンゴル出身の幕内力士旭鷲山をつてに 6 人のモンゴルの若者と来日 (2000 年 10 月 25 日) し、実業団の相撲部を有している大阪の「摂津倉庫」で大相撲入りを目指して猛練習に励んでいた。共に来日した 6 人の中 4 人は角界入りが決まったが、小柄な白鵬に声を掛ける部屋や親方は最後までなかった。失意の帰国前日 (2000 年 12 月 24 日)、彼の希望を何とかして叶えてやりたいと気を揉んでいた旭鷲山が師匠の大島親方 (元大関、旭国) に話し、その大島親方から友人であった宮城野部屋の熊ヶ谷親方 (元幕内力士、竹葉山) への申し入れを受諾してもらっての宮城野部屋入りが叶ったのである。当時の白鵬は年齢 16 歳、身長 176cm、体重 67kg の相撲経験のない色白の細い少年であった。入門後に判明したことであるが、白鵬の父親はメキシコオリンピック大会のレスリングの重量級で銀メダルを獲得し、あのモンゴル相撲の横綱を 6 回も経験したモンゴルの国民的英雄であったのだが、白鵬は自分の口からそのような話は一切出さなかった。当然のこととしてそのような情報を知る由もない親方は相撲経験のないか細い白鵬少年に対して大きな期待を掛けていたわけではない。相撲の稽古よりもとにかく身体を大きくするというので、ちゃんこ料理をはじめ牛乳等で体重を増やす日々が続いた。

一方、朝青龍はモンゴルの高校から日本の高校相撲の名門校といわれている高知県明德義塾高校からのスカウトによって来日を果たした。同校の凄まじい稽古によってメキメキと頭角を現し、高校 2 年次のインターハイではベスト 8 まで勝ち進んだ。3 年次での高校横綱の期待も高まる中、高校を中退し、同校相撲部監督と旧知の仲であった高砂親方 (2 代目: 朝潮) の門を叩いての入門であった。入門時の身長は 1.83cm、体重 105kg の筋肉質の身体を持ち主であった。

2. 白鵬包囲網との対戦成績と朝青龍越えの可能性

白鵬時代を築くためには年間 6 場所、90 日間の取り組みの対戦相手に一つでも勝ち、優勝杯を数多く手にすることである。白鵬を取り巻く包囲網と彼らとの対戦成績を見ると、現時点で負け越している (6 勝 12 敗) 力士は横綱朝青龍だけで、後は若の里 (6 勝 6 敗) と五分の対戦であるが、他の力士とは大関陣の千代大海 (15 勝 6 敗)、魁皇 (16 勝 4 敗)、琴光喜 (15 勝 8 敗)、琴欧州 (13 勝 6 敗) と勝ち越している。毎場所対戦の可能性を持った力士に対しても負け越している力士はいないが、対戦成績で負け数の多い力士として安馬 (9 勝 4 敗)、稀勢の里 (9 勝 4 敗)、雅山 (17 勝 4 敗) あたりが警戒を要する力士であろう。対戦の番数は多くないが新進気鋭の若手との対戦はエストニア出身の大型力士把瑠都 (5 勝 0 敗)、モンゴル出身の鶴竜 (4 勝 0 敗)、元高校横綱からの角界入りを果たしている豪栄道 (3 勝 0 敗) とは敗戦はなく、上り調子の大関候補で、業師と言われる身長 1.68m の豊ノ島との対戦も 8 勝 1 敗とリードしている。大関陣の魁皇 36 歳、千代大海 34 歳、琴光喜 32 歳といった彼らの年齢の衰えや、若手の成長等考えても横綱白鵬を脅かす存在は今の状況では考えられない。加えて、この 1 年 6 場所の白鵬の敗戦は朝青龍 (2 敗)、安馬 (2 敗)、千代大海・琴光喜・琴欧州・安美錦・稀勢の里 (各 1 敗) で、これを見ても白鵬時代の到来を予感させるに十分な包囲網の実態である。

3. 陰りが見え始めた朝青龍と勢いのある白鵬

1999 年 3 月場所、序の口 34 枚目で 6 勝 1 敗のスタートを切りこれまで 22 回の優勝を遂げ、2004 年から 2006 年にかけて 18 場所中、15 回も優勝を果たし、とりわけ 2005 年は全 6 場所中 6 場所の年間完全制覇、しかも 84 勝 6 敗の無敵を誇っていた朝青龍も近年思うような結果を出していない。2007 年 9 月場

所、11月場所<前述の如く病気怪我の療養中のために帰国していたモンゴルでサッカーのゲームに参加したことが発覚したための>出場停止以降2008年1月場所から13勝2敗、3月場所：13勝2敗（優勝）、5月場所：11勝4敗、7月場所：3勝3敗9休、9月場所：5勝5敗5休、そして来るべき11月場所も古傷の肘の治療でモンゴルに帰国し、休場を宣言している実態は横綱朝青龍の強さに陰りが見え始めた根柢となり得るのではなかろうか。

逆に、2007年9月場所以降の白鵬の戦績は13勝2敗の横綱での初優勝、11月場所：12勝3敗の優勝、翌2008年1月場所：14勝1敗の優勝の3連覇、3月場所：12勝3敗、5月場所：11勝4敗、7月場所：15勝0敗の自身2回目の全勝優勝、9月場所：14勝1敗の通算8回目の優勝を果たしている。

4. これからの白鵬の課題

白鵬は右四つで、得意技は左からの上手投げであり、組んでよし、投げてよし、突いてよしのバランスの良い技を繰り出せる力士である。ただ、動きの速い安馬や安美錦の敗戦に見られるように自分十分の体勢になれない時に必要以上に強引な攻めで墓穴を掘る敗戦がある。じっくり構えて、四つに組んで落ち着いて取って行けば取りこぼしによる敗戦は最小限に食い止められ、結果として毎場所好成績に結びつくのではなかろうか。また、2005年5月場所で150kgを越えた体重がこの3年間ほとんど顕著な体重増がみられないが、この体重を160kg台に増やすことも白鵬の今後の課題の一つと考えられる。

5. 白鵬、朝青龍の立ち合いと栃若、柏鵬の立ち合いの比較

図7は昭和30年代の大相撲界の繁栄を盛り上げた「栃若時代」の両雄、横綱栃錦と横綱若乃花が全勝を賭けた大一番での立ち合いの連続写真で、図8は昭和30年代後半の大相撲界を盛り上げたいわゆる「柏鵬時代」の横綱大鵬と横綱柏戸のこれまた14勝0敗同士の優勝をかけた千秋楽の立ち合いである。この立ち合い（手付きはなく、中腰のまま立ち上がっている）栃若時代も柏鵬時代も今日のように両者土俵に両手を付いての立ち合いではなかった時代の立ち合いである。相撲の時代的な変化の一端と、しかしながら両者の立ち合いの気魄、スピード、力強さなどが十分に感じられる連続写真として、参考までに示したものである。

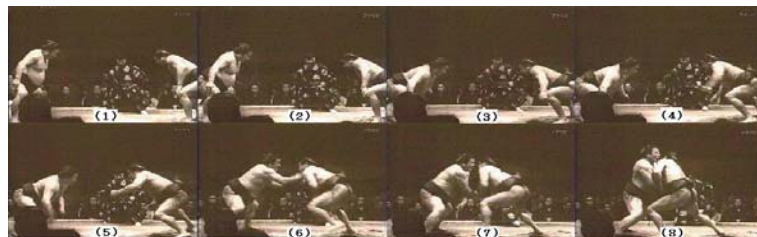


図7 昭和35年3月場所、栃若時代の栃錦（左）と若乃花（右）の14戦全勝同士の全勝優勝を賭けた取り組み（若乃花が寄り切りで勝利）の立ち合い（NHK放映画像から植屋作成）

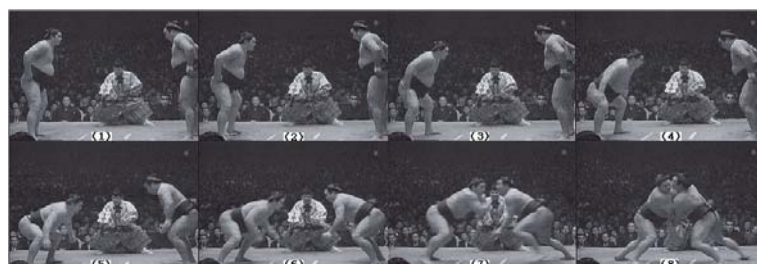


図8 昭和38年5月場所、柏鵬時代の大鵬（左）と柏戸（右）の14戦全勝同士の全勝優勝を賭けた取り組み（大鵬が掬い投げで勝利）の立ち合い（NHK放映画像から植屋作成）

V. まとめ

朝青龍は入門から僅か13場所で大幕を果たし、26場所で横綱まで上り詰め、幕内優勝22回（歴代第4位）、幕内通算勝率8割3分2厘（歴代1位）、年間勝ち星84勝（歴代第1位）、7場所連続優勝（歴

代第1位)等の輝かしい実績を持った現役横綱である。しかし、その勢いもこの2年間の実績から見れば下降気味にあるのは否めない。そして、白鵬は入門そのものが朝青龍より2年遅れで、その出世のしかたも朝青龍に2年間の遅れを示しながらも着実な出世をしている。現時点での両者の優勝回数も22回対8回であり、両者の対戦成績も朝青龍が12勝6敗とリードしているが、この1年間に限定すれば優勝回数では朝青龍1回、白鵬4回、6場所の通算勝ち星は朝青龍45勝16敗26休、白鵬78勝12敗、両者の直接の対戦成績は朝青龍の2勝1敗であるが、朝青龍は3回の休場がある。まさに白鵬の方が上昇気味にある感は否めない。加えて、本研究で分析した平成20年初場所における両者の“47秒”間に及ぶ大一番の両者の取り組みで白鵬が勝利を取めたという実績は白鵬にとっては大きな自信となったであろうし、逆に朝青龍にとっては、これまでの両者の実力差が思いの外縮まっていることを実感せざるを得ない状況と思われる。さらに、この数場所、その他の力士が「朝青龍、恐れるに足りず」と言わんばかりに朝青龍戦に自信を持った取り組みを展開している。朝青龍が優勝を重ねてきた朝青龍時代はまさに一人横綱時代であり、彼を脅かす存在の大関陣もいなかった。その点、白鵬が横綱を張って以来の大相撲界は将来性豊かな大型外力士把瑠都を始め、白鵬包囲網は朝青龍時代よりは幾分厳しいものがある。

それ故、白鵬時代が到来するか否かは兎も角として、朝青龍と白鵬の力関係から言えば、間違いなく場所ごとに白鵬が朝青龍に肉薄し、そして凌駕していくことは間違いのないことと推察される。本稿を執筆している時点で、朝青龍の九州場所(2008年11月9日初日)を左肘の怪我の再発(9月場所10日目から休場)で休場することが決定している。最悪の場合は2009年初場所の成績次第では朝青龍の角界引退の可能性さえ危惧される状況である。そうなると、時代は白鵬時代への突入となるのは必然である。

VI. 参考文献

- ・NHK大相撲放送(2008年1月27日)
- ・NHKアーカイブス(2008年10月18日)
- ・大相撲(1999~2008)、読売新聞社、第45巻1号(485号)~第54巻10号(614号)
- ・植屋清見(2006)、史上最強横綱の可能性を秘めた朝青龍の強さの秘訣—その取り口のバイオメカニクスの分析からの立証、日本体育学会第56回大会予稿集、オーガナイズドセッション、スポーツの技術論、P27
- ・植屋清見(2007)、平成19年度秋場所における横綱白鵬の15日間の取り組みのバイオメカニクスの検討、山梨大学教育人間科学部紀要、第9巻、pp47-54
- ・植屋清見、小町昂史、澤辺直人、山田直弘、比留間浩介(2008)、平成20年初場所における横綱白鵬と朝青龍の47秒の攻防に関するバイオメカニクスの検討、第20回日本バイオメカニクス学会大会、スポーツパフォーマンスへの挑戦~より速く、より高く、より遠く~、p81、仙台大学
- ・<http://sumo.goo.ne.jp/ozumojoho.kyoku/special/hakuho/data.html>
- ・<http://www2s.biglobe.ne.jp/~wakamatu/syoukai/doru.html>
- ・<http://sumo.goo.ne.jp/ozumo-kyoku/special/hakuho/history.html>